

捕鯨 (1/2)

～捕鯨の歴史と文化・呼子小川島～

■捕鯨のはじまり

鯨と人の出会いは、はるか古代へさかのぼる。日本各地の遺跡、古墳の壁画などからみて、その頃から鯨を捕え、徐々に肉・油・骨、あますところなく使われるようになり、生活を豊かにしていた。

室町時代後期になると、紀伊半島（和歌山県）の太地等が捕鯨地として有名となり、その技術が江戸時代に入り、五島、平戸から壱岐を経由して、文禄に入り、波多氏の家臣中尾氏が、呼子小川島を拠点とし、松浦党水軍の流れとあいまって捕鯨業が発達していく。

当初は、鎗や鉾で突き取る方法でしたが、その後網取り法に切り替わり、3代目中尾甚六（1763年頃）になり大漁に恵まれ、急速に繁栄する。

■船40～50艘の一大事業

何しろ、地球上最大の海の動物を捕まえるのですから大変である。初冬（12月頃）北から南へ回遊する頃から、鯨の関係者は勢いづく。

まず、丘の上にある「山見」から発見の合図があれば、待ちに待った加子（水夫）たちは直ちに現場に急行する。その船団は次のような構成である。

1. 勢子（追）船16艘8人漕ぎで、網代（あじろ）に追い込む速い船。
2. 双海船6艘1艘に網を19反ずつ積み、8人漕ぎで、網を張る関係上スピードを要求される。
3. 双海付船6艘：8人漕ぎで、関係用具と網16反積んでいた。
4. 持双船4艘：杉丸太2本を常備、仕留めた鯨を船と船の間に渡した丸太に結びつけ、基地（納屋場）に運ぶ。
5. ちろり船2艘：網6反ずつと予備品を積み、6人漕ぎで、船と船との連絡をする。

その他の船を加えると、大小合わせて約40～50艘を必要とした。

～2/2へつづく～

◎エピソード・伝承・うんちく など

鯨について、こんな悲話も伝えられています。
宝暦（1752年）の頃、一人の羽差が夢をみます。夢の中で親子連れの鯨が「私たちは今、弁天様にお参りに行くところです。お参りを済ますまでは、どうかお見逃し下さい」と懇願します。
夢から目覚めた羽差は、急いで現場に急行しますが、残念ながらすでに鯨は捕らえられていました。羽差が肩を落とし帰宅したところ、梁にしっかりと結んであったはずの鉾が落ち、羽差の愛児の胸に突き刺さり、すでに息絶えていました。羽差は悲しさと落胆のあまり発狂し、ついには自らの命を絶ってしまいました。弁天様は呼子湾西方の入口に位置する小川二つからなり、現在の呼子大橋の下にある神社です。大橋にカーブがついているのはそのお社の真上を避けるためと言われていています。

分野 産業

地域 呼子

◎地図・写真・統計資料など



(九州大学デジタルアーカイブHPより)



(唐津新聞社より)

◎引用・参考文献（出典）

- ◆『九州ものしり学 西海 捕鯨の時代と文化 玄海灘に勇魚あり（上・下）』
- ◆『くじらといきる 西海 捕鯨の歴史と文化』（佐賀県立名護屋城博物館）
- ◆『捕鯨王国』北島磯舟 著

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

捕鯨（2/2）

～捕鯨の歴史と文化・呼子小川島～

～1/2からつづく～

一方、捕鯨に携わる人たちの従業員数は沖立人（沖の現場で働く人たち）は羽差（モリを仕込む人、射手）50人余、加子600～700人合計600人～800人、ひとつの組でも大漁の時には大勢の人がかりだされ、これらの組が3組もあれば数千人にのぼり、これらの人々を常にかかえておかねばならない。

豊漁の年は「鯨一頭捕れば七浦にぎわう」と好景気に酔うとしても、ひとたび2～3年でも不漁が続けば、忽ち莫大な損失を蒙る。

いかに藩主の保護があったとしても、現代風に言えば、ハイリスク・ハイリターンの世界だったであろう。

■鯨と“海の男”、鯨供養

勇壮な“海の男”と鯨の闘いは、発見し、追い込み、銚・鉾を仕込み、のたうち回る鯨の自由を奪い、解体するまで、壮烈な闘いが続きます。そして骨・肉はもとより、流れ出る油は海上での回収は不可能なので納屋場で釜で炊き、浮上した油を柄杓で回収、その油は灯明や害虫駆除などに活用し、捨てる部分は全くなく、多大な恩恵をもたらしました。中尾組をはじめ、捕鯨に携わる人々は鯨の霊を懇ろに弔い、鯨鯨供養塔を建立し亡くなった鯨の成仏をお祈りしています。

「中尾様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」と繁栄を誇った捕鯨業も明治維新、廃藩置県により藩の保護が絶えると資本力がない個人経営は衰退の途をたどりました。

明治10年頃中尾組は廃業、それを明治11年（1878年）小川島捕鯨組が継ぐ形になりました。後に小川島捕鯨株式会社が設立されて、遠洋では母船式捕鯨となり、昭和9年南氷洋への出漁となります。

捕鯨株式会社は明治・大正・昭和と存続しますが、昭和23年に閉鎖。その後、唐津、呼子、名護屋を基地とする小規模の捕鯨事業はいくつか継起しましたが、いずれも大きな繁栄を見ることはありませんでした。こうして一切の捕鯨船が西海地方から姿を消したのが昭和36年ごろのことでした。

分野 産業

地域 呼子

◎地図・写真・統計資料など



（九州大学デジタルアーカイブHPより）



（唐津新聞社より）

◎引用・参考文献（出典）

- ◆『九州ものしり学 西海捕鯨の時代と文化 玄海灘に勇魚あり（上・下）』
- ◆『くじらといきる 西海捕鯨の歴史と文化』（佐賀県立名護屋城博物館）
- ◆『捕鯨王国』北島磯舟 著

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html